

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：32665
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2018～2020
課題番号：18K02009
研究課題名(和文) 社会階層と社会的ネットワークに関する大規模地域比較分析

研究課題名(英文) Research on Social Stratification and Social Networks

研究代表者
菅野 剛 (SUGANO, Tsuyoshi)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：10332751
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：人間社会における格差と絆という、最も根本的かつ相容れないことがらについて、質問紙法に基づく調査を実施することで研究を行った。これまでに蓄積した調査データの整備を進めつつ、本研究では郵送調査を実施し、地域比較を行うことで知見の一般性を高める試みを行った。コロナ禍に突入することで研究計画は大きく変わった。これを転機に、社会階層とネットワークに関する普遍的でマクロな社会現象と並行して、身近な支配や権力、搾取という実感を踏まえての考察が重要となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでに実施した郵送調査データと、本研究で行った郵送調査データの整備により、一研究室が手作業で行った割には大規模な地域比較調査研究の礎を築くことができた。地域比較調査研究では、対称的な比較地域を恣意的に選定することで、分析で明らかになる結果のコントラストが大きく変わることが予想される。東京都内・近郊での調査結果を蓄積し、マージすることで、ある程度、恣意的な解釈にならないように意識的なデータ分析を進めることが出来る。

研究成果の概要(英文)：In human society, disparity and bondage are the most fundamental and incompatible things. We conducted a survey based on the questionnaire method to study inequality and ties. The survey data accumulated so far was further developed. In this study, a mail survey was conducted. An attempt was made to increase the generality of the findings by making regional comparisons. Because of the Corona disaster, my research plan changed drastically. This was a turning point. The universal and macro social phenomena of social stratification and networks are important. But it also became important to consider domination, power, and exploitation in the world around us.

研究分野：社会階層、ネットワーク、搾取

キーワード：社会階層 ネットワーク 社会調査 地域比較 郵送調査 搾取

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 何気なく過ぎていく私たちの日常は、無数の人々のつながりの上になりたっている。グローバル化が進み、国内外でさらに高度で複雑な分業が組みあわさっている。需要と供給と欲望が複雑に絡みあい、一人ひとりの小さな蠢きは、ひるがえって巨大な波として自らにおおいかぶさっている。個々人が置かれた状況で自らを翻弄し、社会的な格差も拡大の一途をたどっている。格差とつながりが複雑に絡みあった現状を把握し、分析を行うことは、日本における喫緊の課題である。

(2) そして、急速に進展する格差社会における様々な問題を取りあげるため、日本社会を対象とする大規模な社会調査が実施されている。これら大規模調査においては、様々な調査項目がとりあげられている。本研究では、取り組む内容を重点的に絞りこんだ。全国調査による大規模研究で得られる知見の補完を念頭におき、人々の間をどうしようもなく分け隔てる格差と、人々のつながりである社会関係に注目し、特に重点的に取り組んだ。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、これまでに実施してきた社会における格差と人々のつながりについての調査研究の一つのまとめである。これまでの一連の調査研究においては、一箇所の地域ごとに社会調査を実施してきた。地域比較調査を一度に実施するのではなく、実質的に実施可能な調査規模に抑えて、継続的に東京近郊において調査を実施してきた。調査実施時期に若干のずれは生じてしまうが、現実的に実現可能な範囲で進め、地域調査の集合セットの構築を目指した。

3. 研究の方法

(1) マクロな社会の計量的研究
社会階層と社会的ネットワークに関する大規模地域比較分析は、大局的な鳥瞰図であり、本研究の骨格をなす。この実現のため、一つの有効な方法として、確率標本抽出に基づく郵送地域調査の実施を行う。これまでに実施してきた調査研究に加え、対照的な地域を選定し、新たに調査を実施し、調査データを蓄積することで、複数地域での比較調査を行う。

(2) ミクロな社会の計量的研究
視点を変え、局所に目をこらすこともできる。コロナ禍に突入することとなり、調査研究における副次的・必然的な展開が生じた。
社会階層と社会的ネットワークに関する大規模地域比較分析の背後には、隠蔽され続ける不可視の冷徹な暴力と権力を有する者同士の駆け引きと共謀、そして常に虐げられモノのように利用され続ける人々の日常が横たわっている。
社会階層を形成するダイナミックなプロセスには様々なものが考えられる。例えば、巧みな言葉による印象操作。例えば、見渡す限りに織りなされた社会関係包囲網。例えば、事実の一方的定義や社会的事実の構築。例えば、秩序としての搾取の常態化。私たち人間は、理不尽で罪深い存在である。例えば、権力行使を避けると公言しつつの無意識の言動圧力。例えば、人権尊重を心がけているのに行動から垣間見えてしまう差別行為。例えば、正義や権利を守るために抱く強い意思のもとでの、無意識な徹底的な象徴的暴力。数字と事実は無意味であり、白は黒となり、黒は白となる。散りばめられた言葉と刻み込まれた行為は沈殿し、秩序として搾取を常態化する。社会階層と社会的ネットワークの交錯は、日常における対面状況で、一瞬一瞬に、極めてリアルに顕現する。

4. 研究成果

研究成果は、大きく分けて2つである。第1は、オーソドックスな社会調査に基づき、社会階層とネットワークの構造から、日本社会のマクロな問題を探る計量的社会学研究に関する研究成果である。第2は、身近な社会空間において、社会階層とネットワークの構造から、日本社会のミクロな問題を探る探索的計量研究に関する研究成果である。

(1) 2018年度の研究成果は、社会調査の準備と、集合現象やウェブ・サイエンスとして文化のネットワーク現象を取りあげた報告である。調査環境の構築、資料収集、調査実施の準備、既存の調査データの整備を行った。足立区、板橋区、品川区、世田谷区、台東区、中央区、港区等の

東京地区と、その他の地域で得られた貴重なデータのサンプルサイズは 5000 を超え、多様なデータ分析手法の柔軟な適用により、様々な角度から検討することで知見をより強固に確認できる。これらの調査では、それぞれの地域単体で 500 程度以上のサンプルサイズを有しており、それぞれ多変量解析に耐える。オーソドックスな社会調査と並行して、多様で大規模なデータの処理方法について情報収集を行い、適用・応用について試行錯誤を寺田怜加とともにいった。寺田の柔軟な発想と大きな貢献により、正統的文化とサブカルチャーの社会的伝播現象について、時系列分析とネットワークの観点から興味深い示唆・知見が得られたことは大きな成果である。

(2) 2019 年度の研究成果は、本研究の核となる社会調査実施、データの収集である。練馬区において郵送地域調査を実施し、格差と絆に関するデータを収集した。具体的には、当初計画に基づいて、確率標本抽出に基づく郵送調査の準備を慎重に進め、実際に調査を行った。調査については、東京都練馬区において、選挙人名簿抄本より 25 歳から 64 歳までの男女について、確率比例抽出（等間隔抽出）、サンプリング作業を行った。諸般の事情により調査票を検討・修正し、1526 名へ匿名回答調査票を発送した（宛先不明・転居先不明を含む）。暫定回収は 525 程度、回収率は約 34.4% である。

(3) 2020 年度の研究成果は、調査作業とデータ化・環境構築である。現在も作業を進めている。既存の調査データとのマージにより、大規模比較データとして、重要性を増す。調査により、地域社会における格差、社会関係、政治意識について、これまでに得られた知見を補強する結果が得られる見込みである。社会調査は、認識の一つの方法である。結論先にありきが身体にこびりつき、都合よい証拠による装飾こそが実証研究と信じて疑わない末期的症状に陥らないため、石橋を叩いて壊すくらいの覚悟が求められる。

(4) 2020 年度のもう一つの研究成果は、身近な社会空間において、社会階層とネットワークの構造から、日本社会のミクロな問題を探る探索的計量研究に関して得られた知見である。置かれた状況と日々の生業の中で、副次的にしかし必然的に生じた帰結となった。

2020 年度はコロナ禍となり、日本社会は混乱に陥った。マスクがない。トイレットペーパーや生活必需品もない。被雇用者が買い物ができる時間帯には、何も残っていない。大学での授業についても、開始時期も延期され、さらに再延期ともなった。遠隔授業となり、教員は不要不急の出校を控えた。職員は、勤務のために出校する必要があった。命の格差という言葉が脳裏をかすめた。大学業界は、教職員も学生も含め、一種のパニック状態にあった。

2020 年度の春先は、総じて悲惨な状況であった。危機的状況においては、社会的弱者が容赦なく可視化される。業界のあり方、組織形態、IT 運用の違い等により、人々の命運も大きく分かれた。広く大学業界でも、論文執筆と研究が捗った層と、携わる余裕のない層に、二極化した様子が匿名 SNS などで見てとれた。例えば、手術をし、歯を治療し、論文も数本書いた、という教員の書き込みを見かけた。他方で、押し寄せる業務に心身を病む教職員の声にならない悲鳴にも遭遇した。

同じ職場であっても、強者と弱者に被雇用者は二極化したといえる。社会的分断は、大きな社会における大文字のストーリーだけではなかった。クレパスのように目前に口を広げる社会的断層は、自ずと支配、権力、搾取をギラつかせた。学部の遠隔授業 LMS である Blackboard でのサポート掲示板（社会学科）にて、学生からの様々な問い合わせに昼夜問わず対応を迫られ、社会学科事務室スタッフとともに対応にあたり、大変な労力を要した。Blackboard については、自身は使わないため、完全に業務担当外であった筈だが 4~5 万文字程度の回答をすることとなり、「人間チャットボット」として深刻な状況に陥った。その他の業務にも学務委員や社会学科事務室スタッフとともに膨大な時間を費やした。

<https://sugano-lab.github.io/blackboard-faq/>

<https://sites.google.com/a/nihon-u.ac.jp/nusocio/>

<https://sites.google.com/a/nihon-u.ac.jp/nusocio/home/rishu>

<https://sites.google.com/a/nihon-u.ac.jp/nusocio/home/online>

<https://sites.google.com/a/nihon-u.ac.jp/nusocio/home/qanda>

<https://sites.google.com/a/nihon-u.ac.jp/nusocio/home/rishu2020>

誰しもが抱えている自分の身の回りという小さくも大きな社会で、果たして当時一体何が起きていたのか、事後的にでも格差とつながりについて考察をすることは重要といえる。データ化し分析も行ったが、ここでは省略する。

本研究の対象である、格差とつながりは、ものごとの表裏一体である。日常の身の回りのあらゆることから、わずかに染み出して見える、支配、権力、搾取の形跡を、感覚や経験でたぐりよせることは可能である。例えば、社会的権力層の表明を、一連の発言や主張を文脈として捉え、論理的・事実整合的ではないことや結論先にありきという点を確認すること。例えば、社会的権力

層において観察された行為や行動が、利己的な社会・経済的利益と親和性が高いことを確認すること。

人間の能力と言葉は、ものごとの真偽の追求や科学的探求のためにではなく、他者の説得、印象操作、社会的事実の構築のために発達・発展したという仮説も存在する。高度に発展した資本主義社会では、コロナ禍のような非常事態においてですら、私たち人間は格差のメカニズムに操られるゾンビと化す。権力、利権、名誉、肩書への飽くなき欲望は限りない。社会現象のどの側面に焦点をあてるのか。非常事態において語られる清く正しく美しい理想的な言葉と、正反対となる実際の行動が併存する際、社会調査は重要な分岐点に直面する。社会学に携わる者自身が「精神なき専門人」に染まっていないか、自戒を心がけたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 寺田怜加・菅野剛
2. 発表標題 教養の入口としてのアニメから考えるオタクの文化資本の獲得について
3. 学会等名 第67回数理社会学会大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------